豊翔ジャーナル６月号　コラム原稿

「指導で消える笑顔」

保育園(所)での不適切な指導の報道が相次いでいる。

静岡裾野市では、保育士が園児にむかついたとカッターナイフを見せて脅したり、指導に従わず走り回る園児を逆さ宙づりにしたと言う。仙台市では、みんなと食事をしない園児に罰として下着姿での食事を強要した。さらには、富山市では保育士の判断で、おやつや食事を与えないこともしばしばあるらしい。絵本で頭をたたく、罵声を浴びせるような叱責など、理解に苦しむ対応が指導と言う名のもとに平然と繰り返されている日常があるのだろう。

「三つ子の魂百まで」ということわざがある。「三つ子」を三歳までと言う人もいるが、幼少期という意味だろう。「百まで」は年老いてもと言う意味でよい。では、ことわざで言うところの「魂」とは何かが問題である。それは性格・人格に他ならないだろう。決して「魂」＝「躾（しつけ）」ではない。なぜなら、このことわざは幼いころに形成された性格や人格は大人になっても変わることがないと言う意味であって、幼いころに習ったり覚えたりして身につけたスキルや考えが一生のものになると言うことではないからだ。この勘違いにより、指導者は教条主義的な指導にこだわり、時にはしつけと称し、時には甘やかしてはいけないと、給食を時間内に完食させるために、嫌がる園児の口の中に食べ物を無理やり押し込むことを正当化するのである。時間感覚もなく時計も読めない園児は自分の腹時計を拠り所にしている。そんな大人に園児は泣いて叫んで抵抗するだろう。癇癪を起すほどの抵抗は、寂しさでも悲しさでもない。それは「怒り」そのものである。

保育とは、集団行動の訓練でもなければ、指導者の指示に従う主従関係を学ぶ場でもない。温かく見守って育てる営みだと思う。意欲・協調性・粘り強さなどを伸ばすことに力を入れてあげることが、将来の人間的成功に結び付くという科学的データも存在するらしい。

しかしこれらは保育に限ることだけではない。豊翔高等学院に通ってくれている生徒が成長するまで、温かく守り育てる慈しみが私たちに求められていると思う。

（丹羽　豊）